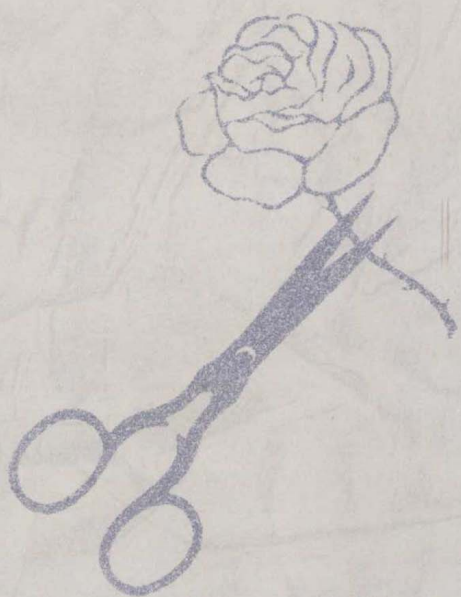
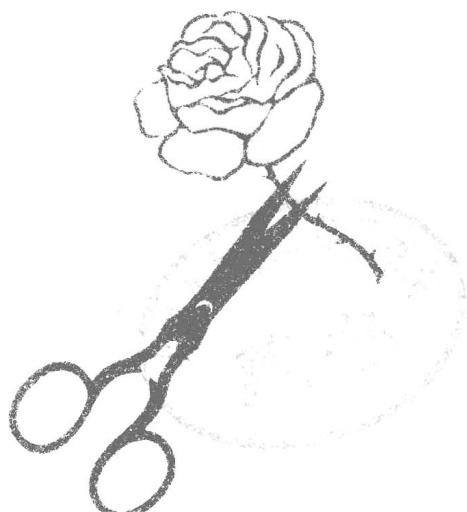




香水と手袋

佐野 洋



文藝春秋

香水と手袋

昭和五十六年五月二十日 第一刷

定価九八〇円

著 者 佐 野 洋

発行者 杉 村 友 一

発行所 株式会社 文藝春秋

〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三―二三

印刷 凸版印刷

製本 矢嶋製本

万一落し・乱丁の場合はお取替えいたします

目次

見慣れぬ庭木 5

仮面の裏側 29

別れの電話 53

拾った札束 77

試写会の券 101

人生相談の殺人 125

予定された殺人 149

金魚鉢の女 175

指のほくろ 199

嫉妬深い妻 223

不吉な年賀状 247

装帧 安彦勝博

香水と手袋

初出掲載誌

「BOX」昭和五十五年四月号～五十六年一月号・三月号連載

見慣れぬ庭木

まず最初に、このシリーズの題名『香水と手袋』について、説明させていただく。

——先日、地下鉄に乗っていて、一つの発見をした。

私の隣の席には、買い物帰りらしい、若い女性が坐っていたのだが、膝で荷物を抱えるようにしている彼女の手は、しゃれたデザインの手袋に包まれていた。

晴れてはいたが、その分だけ寒いという日であった。テレビの天気予報では、日本列島全体が、シベリヤからの寒波の影響を受けていると言っていた。

こういう寒い日は、手袋をした方がいいのかもしれない……。私は、そんなことを考えながら、漠然と、車内を見回した。手袋をしている人は、彼女のほかにも何人もいた。ところが、驚いたことに、それはすべて女性であった。

セールスマン風の若い男、学生、さらにかなりの年輩のもう第一線からは引退したのではないかと思われる老人……。それら、車内の男性たちは、一人の例外なく、手袋をしていない。

そう言えば、私自身も、手袋は、つい最近北海道旅行の際、札幌で買ったものを持っているだけである。そして、それも、東京へ帰ってから、洋服ダンスの小引出しに入れたままになっている。

こうしてみると、東京では、男性が防寒用に手袋をするという習慣はなくなったものらしい。しかし、そういう傾向が始まったのは、いつごろからだったのだろう。

例えば、私の場合、学生時代、毛糸で編んだ手袋をしていた。そのため、電車の中で本のページをめくりにくく、ついには、右手の親指、人さし指の二本だけ、手袋の指先を切ってもらったものだった。

恐らく、当時は、電車の中なども、現在より寒かったのであろう。バスにしても、会社の中にしても、いまのように、暖房が行き届いていなかった。そのため、部厚い下着をつけるとか、手袋をするとかして、身を守ることが必要だったのだろう……。

とすると、いわゆる高度成長期から、少なくとも、東京においては、男たちが手袋をしなくなったのかもしれない。

ところが、そんな風に考えていた矢先、次の駅で乗り込んで来た男の一人が、皮の手袋をしていたのである。三十前後、黒っぽいダブルのオーバーを着、靴は光っていたし、髪もちゃんと手入れされている。そして、手袋に包まれた手には、アタッシュ・ケースが……。

ふだんの私なら、彼を敏腕な営業マンと見たであらう。(ついでながら、電車に乗った際、他の乗客の職業や、家族構成、趣味などをひとりひとり想像してみるのが、私の秘かな楽しみなのだ)

だが、このときは、手袋について、前述のようなことを考えていたためか、彼からは、全く違った印象を受けてしまったのだった。

つまり、犯罪者という印象が、まさきに私に訪れたのである。

恐らく、手袋——指紋を隠す——犯罪者と言った連想が働いたのであろう。そう思っていると、膝に載せたアタッシュ・ケースは、いかにも曰くありげだし、黒っぽいオーバーも犯罪者にこそ似合うような気がして来る。

もちろん、私は彼を尾行したりはしなかったし、私のその印象を確かめる方法はなかった。というより、多分、私のその想像は違っているだろうと思う。

実は、シリーズ名に使った『手袋』は、私のこの小さな体験に根ざしているのである。

犯罪者にとって、一番注意しなければならないのは、指紋を残さないことであり、従って、手袋は彼らの必携品と言えるだろう。つまり、『手袋』という言葉に、私は『犯罪』の意味をこめたのである。

では、『香水』の方はどうか。

最近では、男性化粧品も多く出回り、オーデコロンを愛用している男性も少なくないようだ。しかし、やはり『香水』と言われて連想するのは、女性であろう。

『香水と手袋』とは、言い換えれば、『女性と犯罪』ということになる。

そして、それは……。

いや、これ以上の説明は、ここでは避けよう。小説を読んでいただければ、わかることなのだか

×

×

×

×

夫婦そろって、二週間、ハワイで遊んで来たところ、留守の間に、庭の植木が増えていた。

久しぶりに、私の事務所、つまり『友井法律事務所』にやって来た坂部仙一は、そんな奇妙な話を披露した。

坂部は大学時代の友人である。大学を卒業すると、伯父の経営する同族会社に入社し、現在は、取締役総務部長という肩書を持っている。

大学時代の友人には、もう一人、宝田修という男がおり、現在は某出版社の雑誌編集長をしている。

私たち三人は、大学を卒業してからも、年に三回ぐらいは、一緒に食事をしたり、酒を飲んだりしている。ついにながら、現在、私の事務所には、専属調査員が一人いるが、それは、宝田の妹であった……。

さて、坂部の話だが――。

――坂部は、毎年、暮から正月にかけて、ハワイで過すことにしている。特別契約のマンションがあって、その一室を優先的に借りる権利を持っているのだそうだ。

暮の二十六日に出発して、帰って来たのが、一月八日。家は、田園都市線F駅の近くの新興住宅地にあるが、こどもがいなかったため、留守中は、鍵をかけ、兩戸も閉め切っておく。

最初のうちは、こんな形で家を空けるのが無用心のような気もしたが、毎年無事にすんでいる

ので、ことしはハワイにいる間、盗難の心配をしたことなど、一度もなかったという。

ところが帰国した翌日、庭の南西側の隅に、見なれない寒椿かんつばきが植わっているのを発見した。いや、寒椿そのものが見慣れないのではなく、そこには、もともとそんなものが植えられてはなかったのだ。

発見者は、坂部の妻杏子きょうこである。つまり、正確に言えば、九日の朝、坂部自身はそれに気づかずに出勤したのだが、帰宅して、杏子から、その発見の報告を受けたのだった。

『あたしも、最初はわからなかったの。ただ、庭の感じが何となくおかしい気がして……。でも、二週間も留守にしたせいかな、と思って、あまり気にしなかったの』

ところが、昼ごろ買物に出ようとしたとき、ちょうど近所の主婦と顔を合わせ、

『寒椿がきれいに咲いて……。やっぱり、専門の植木屋さんは違いますわね』
と言われて、その存在に気がついたのであった。

『あら、どうしたのかしら？ 一つの間に、あんな木が……。』

杏子は、率直に驚きの声を上げた。

『いつの間になって、奥さん、ご存じないんですか？』

近所の主婦は、不思議そうに、杏子の顔を眺めた。

『ええ』

杏子は、あいまいにうなずいた。

『じゃあ、ご主人が、植木屋さんをお願いになったのかしら？』

『そうかもしれませんけれど……。ねえ、奥さん、奥さんは、その植木屋さんをご覧になっているんですの？』

『ええ……。奥さんたちがハワイに発った、二、三日あとだと思ったけれど……。お宅の前に、植木屋さんのトラックが停っていて、職人さんたちが、庭でお仕事をしているみたいだったわ。あたし、お宅がお留守だということは知っていたけれど、多分、お留守の間にやっておくように、言っで行かれたのだと思って……。』

『じゃあ、主人が頼んだのかしら？』

杏子はそう言ったが、自分では、それを信じていなかった。彼女の夫、坂部は、そういうことには無関心で、すべてを杏子に任せ切っているのだ。

そして、彼女は続けて尋ねた。

『あのおう、そのトラックは、たしかに植木屋さんのものでした？』

『そうだと思いますわ。植木を降ろすところをあたし見ているのだし……。そうそう、トラックの脇腹に、たしか『愛川造園』と書いてあったわ。あたしの中学校時代の先生が、愛川先生という方なもので、ちゃんと覚えているんだけど……。あれ、東京の植木屋さんなんでしょう？ 電話番号も、トラックに書いてあってね、その局番が、目黒あたりのものだったから……。』

杏子が、近所の主婦から聞いたのは、そのようなことであつた——。

「ところがだね」
と、坂部は補足した。

「『愛川造園』という植木屋には覚えはないんだよ。うちの庭をやってくれたのは、淡路さんという植木屋さんなので、女房は、その淡路さんに電話を入れて、聞いてみた。その結果、寒椿を植えた覚えもないし、愛川造園という名にも心当りはない、という返事だったそう。君、この事件、どう思う？」

「どう思うって……。どこか、君のうちの近くに、坂部という家はないかね。その坂部さんに頼まれた仕事を、愛川造園の方で間違えて、君のところで行ってしまった……。そう考えるのが、一番自然な感じがするなあ」

と、私は言った。

「ところが、自治会の名簿を見ても、ほかには、坂部というのはいないんだよ。似た字で板野さんという人がいるけれど、場所的にはずいぶん離れている。それに、一応念のために、植木の注文をしなかったか、と女房が聞いてみたところ、そんなことを頼んだ覚えがないということだった」

「板野さんが、何らかの理由で嘘を言っている可能性はないかね」

と、私は言ってみた。深く考えた末の質問ではなく、頭に浮かんた可能性を、そのまま口にしたに過ぎない。

「まさか……。もし、板野さんの方で、『愛川造園』に頼んだとしたら、それを隠すはずはないだろう？ 現に、自分の庭に植えられるべき寒椿が、こっちに来てしまっており、迷惑を受けているのは、彼の方なんだから……」

坂部はそう答えた。

「それはそうだな」

私も、うなずかざるを得なかった。

坂部が、私のところへ来たのは、この『植木事件』の意味について、私の意見を聞きたいからだという。そして、彼にそう勧めたのは、夫人の杏子で、彼女は、

「弁護士さんなら、調査をする方法をいろいろ知っているでしょうから、『愛川造園』についても、何かを調べてくれると思うわ」

と、言ったのだそうだ。

そこで、私は、テーブルのベルを押し、応接室に、宝田咲子さきこを呼んだ。『愛川造園』を調べるについて、彼女にも、質問すべきことがあるのではないか、と思ったからだ。

なお、私は、応接室で坂部と話をするにあたって、秘かに、インターフォンのスイッチを入れておいた。最初に、坂部が、

「実は、できたら、調べてもらいたいことがあってね……」

と言ったため、話の内容を、宝田咲子にも聞かせておこうと考えて、そうしたのである。

宝田咲子は、昨年、ある有名私立大学の社会学科を卒業した。いわゆる四年制大学である。そして、新聞社、雑誌社などに入社を希望したのだが、彼女の望みはかなわなかった。

何でも、多くの会社が、四年制大学の女子卒業生を受け入れる意思はなく、求人先に当たっても、

最初から『男子に限る』と受験資格を制限していたらしい。

前述のように、彼女の長兄の宝田修は、出版社の編集長をしているのだが、その出版社さえ、『女子の四年制大学出は採用しない』方針とかで、願書を出すことさえできなかった。

もっとも、彼女の兄は、「短大出ということにして、一般事務員の試験を受けてみたら」と勧めたらしいが、これは咲子の方で断った。実際に、編集者として働きたいのであり、わざわざ経歴を偽ってまで、一般事務をやりたいとは思わない、というわけである。

そして、結局、彼女は私の事務所の調査員をすることになった。私のところも、次第に仕事が増え、調査を専門にする者の必要を感じていたのである。

大学を出たばかりのお嬢さんに、調査の仕事がどれだけできるか疑問ではあったが、面接を試みると、頭の回転が早く、理解力も優れているので、案外拾い物ではないか、という気がして採用したのだった。

しかし、私の事務所は、それほどはやっているわけではないから、給料は、新聞社や雑誌社などには行かない。小遣い程度の固定給と、調査の内容に応じて、歩合給を払うシステムである。

私や宝田が大学生のころ、咲子は、まだ小学生であった。色は白いが、神経質そうな少女で、ときどき、私たちに、ませた口を利いたりした。そんな咲子が、ちゃんと成熟した女性として、私の前に現われた——そういう驚きと、一種の懐しさが、彼女を採用させた理由の一つかもしれないが……。